

## アリストテレスの時間論

熊野達六郎

有限的なるもの、現實的なるものは、時間の羈絆を脱する由もない。然しながら、その『時間とは一體、何であるか。もし誰も私に訊ねないならば、私は知つてゐる。がもし訊ねた人に、説明しやうと欲するならば、私は知らない。』(Augustinus, Confessiones XI, 17)かゝる逆語を發せしめる所の困難を擔ふ時間の問題は、希臘に於ては既にエレア學派とヘラクレイトスにより提出されたのであるが、アリストテレスに至つて始めて組織的に考察されたと言ひ得るであらう。然らば、アリストテレスは時間を如何に考察したか。

## (一)

アリストテレスは、時間の論究に當つて、この問題の持つアポリアを先立たしめた。第一に、時間はロゴスに於て語られ思惟されるが故に存在しなければならぬ。然る

に時間<sup>レ</sup>は過去と未來とをその部分として持つが、過去は已に過ぎ去されるものとして、もはや存在せず、未來は未だ來らざるものとして、存在しない。而して非存在から構成されたものは存在し得ないとすれば、時間<sup>レ</sup>は存在せぬといはなければならぬ。然らば非存在を部分とする時間<sup>レ</sup>が存在することは如何にして可能であるか。この時間<sup>レ</sup>の存在性に關するアポリアが先づ打ち開かれなければならぬであらう。(Aristoteles, *Physica*. 217, b. 33—218, a. 3.) 第二に時間<sup>レ</sup>の性質 (*quodis*) に基くアポリアが來る。一般に可分的なるものが存在するならば、その部分の全部か一部が存在しなければならぬ。時間<sup>レ</sup>は可分的なるに拘らず、部分たる過去未來は非存在であり、存在するところの「今」は、しかし、時間の部分でないとするれば、時間<sup>レ</sup>は可分的なるものでありつゝ、その部分は存在しないこととなる。(Phys. a. 3—5.) 第三のアポリアは過去と未來との限界<sup>ホラス</sup>をなす「今」が同一であり續けるか、或ひは變ずるものであるかに關する。(イ)「今」を先づ變ずるものとしやう。過ぎ去れる「今」は或る時に於て無くならねばならぬが、その「今」は嘗て存在したものなるが故に、自己の中に於て無くなり得ない、又「今」と「今」とは隣接しないが故に「今」は「今」と「今」との中間に存する他のものの中に於て無くなることすれば、その中間に存するものは可分的なるものとして無限に區分される無数のも

のと同時にあることとなり、従つて不可能である。このことは「今」が變ずるものであり得ないことを示すであらう。然しながら他面に於て、(ロ)「今」は不變なるものでもあり得ない。有限的、可分的なるものはそれを限界附けるものとして一つ以上の限界を持たなければならぬ。而して有限なる時間の限界をなすものは、二つの「今」であるが、もしこの二つが相同じいとすれば、時間の長短の差は消されるであらう。何となれば、百年の限界をなす「今」と一時間を區切る「今」とが相同じければ何が、これらの長短を區別せしめるか。かくて、得られたる決論は、「今」は變ずるものでもなく、變じないものでもなかつたことである。(Phys. 218 a. 8—30.)

こゝに我々は三つのアポリアに面した。これらのアポリアは時間の様相たる過去現在未來の中、過去未來は非存在であり、しかも存在する現在「今」は時間の部分でないことに、更には「今」の本質につき纏ふ曖昧さに、由來する如く思はれる。アウグスチヌスをして、『殆んど絶望に陥るまで苦闘』せしめた同じ難通アポリアを我々は既にこゝに見出すのである。

## (二)

時間とは何であるか。この問いを先人に問ひ掛けることにより、解明されるであらうか。第一に、ピュタゴラス學派は、物は時間の中にあり、且つ物は天球の中に存することの故を以て、時間は天球であると答へる。(Diels, *Fragmente d. Vorsokratiker*, Bd. I. S. 355. Arist. *Phys.* 218 b. 1.) 此れは論駁するには餘りに素朴な答であらう。(Philoponi in *Physicorum A. S.* 713.) 第二に、プラトン<sup>(1)</sup>は時間を天體の運動 (*ἡ τοῦ θάου κίνησις*) であると考へてゐる。(Platon, *Timaeus* 37 c—38e.) 然し、かゝる見解は、天體が數多ある時は時間も數多あることを導くであらう。しかし時間は唯一である。(Phys. 218. a. 33.) 然らば、時間は天球でもなく、天球の運動でもないとするれば、第三に、時間は運動 (*κίνησις*) 或ひは變化 (*μεταβολή*) と解せられはしないか。我々は運動變化がある時、時間が経過せることを知るとすれば、時間は運動變化であるといひ得ないだらうか。けれども運動變化は運動變化するものに於てあるが、時間はすべてのものに遍在する。更に運動變化には遅速の差別があるが、時間はさうでない。かくて、時間は運動變化であるとの見解をも我々は捨てなければならぬ。(Phys. 218. b. 9.) 我々は再び「時間とは何か」の問いの出發點に喚び戻されたのである。

(1) アリストテレスは、この箇所ではプラトンの名を出してゐない。然し周知の如く、プラトンが世界創造説を説くに際し、神は

永遠の似姿 *εὐμεγέ* たる被造物を能ふる限り永遠に近附けんとして、天體を動き出さしめた時に、不動にして一なる永遠に似せしめて、永遠に持續し數によりて數へられる時間を創成したと説いてゐる。(Timaeus. 37 c. d.) このことから天體の運動が時間であるとの説はプラトンのそれであると推論し得るであらう。尙ほ、この箇所からアリストテレスの時間論はプラトンのを一層精緻に考へたものであらうとの推測が得られる。即ちプラトンは時間と運動、時間と數の問題を、神話的に語つてゐるのを見出す、後に説く如く、アリストテレスは、これらの連關を組織的に取扱つたのである。

- (2) 後に問題にせる如く『メテオロロジーカ』(Meteorology. 1. 2. 35) が、運動は精神に依存しないと説くことも、時間と運動を同一視し得ないことを裏書きするであらう。

然らば時間とは何か。右の諸説を斥けることにより、アリストテレスが如何に考へてゐたかを間接に知り得る。プラトンの説を駁することは、時間が唯一なることを、時間を運動と解しないことは、時間の遍在と、その持續の一様性、等速性を、導き出した。時間は運動と同一でない。にも拘らず時間は運動と無縁ではない、『時間は變化なくしては存在しない』(Physics. 218. b. 2.) 何故かなら、我々が共通感覺 (*αἰσθητικὴ κίνησις*) により運動を知覺しない限り、時間は生じない。深き眠りに陥れるものは、その眼覺めた時、時間の経過を知らないであらう。又闇の中に、物を知覺し得ない時にも、心に變化が生ずれば、時間を意識する。『時間は運動ではないが、運動なくしてあるものでもない』(Physics. 219. a. 1.) 即ち内的であるにしても、外的であるにしても、運動、變化がある

時、始めて時間が成立つとすれば、時間と運動變化の間には或る連關が存在しなければならぬ。然らば如何なる連關を持つのであらうか。時間は運動の何(τι τῆς κινήσεως)であらうか。『時間は運動の様態στάσις又は屬性ἰσότηςである』(Metaphysica A. 6. 1071. b. 10. Phys. 223. a. 19.)とするも、その屬性とは何を意味するのであらうか。

こゝに我々はアリストテレスの時間の定義『前後の順序に従つての運動の數1)、それが時間である。』(τοῦτο γίνεσθαι ὁ χρόνος, ἰδιότης κινήσεως κατὰ τὸ πρότερον καὶ ὕστερον.) (Phys. 219. b. 1.) に達する。この定義の意義を解明することが、當面の課題である。

(1) *κίνησις* なる前置詞は單に「關して」とか、「従つて」の意味に止らず、更に「上より下へ」の、例へば、河の流れに従つてとの、意義を持つが故に、運動の數へられ方が如何なるかを明確にしてゐるといひ得るであらう。

然し數とはこの場合何を意味するのであらうか。我々は數に於て數へるものと、數へられるものと、それによつて數へるものとを、區別し得る。時間が「運動の數2)である」といふ時の數は『數へられた(ἀριθμούνον)」であつて、それによつて我々が數へるもの(ἐπιριθμούνον)とはなら』(Phys. 219. b. 8.) 即ち數へる時の單位をいふのでもなく(なせなら、もし數をそれによつて數へる單位とすれば、過去と未來は同一の數となるであらうから (Philoponus, S. 744.)) 又抽象的な數でもなく (Ross; Commentary to Aristotle's

Metaphysics II, p. 369.) 具體的な數へられたものが意味されたのである。然し何が數へられるのであるか。「運動の數である」とすれば、如何なる運動が數へられるのであらうか。アリストテレスによれば、『多分あらゆる種類の運動の數であらう。なぜなら、ものは時間の中に生じ滅し成長し變質し位置運動する。運動が運動である限り』に於て、各の運動の數である。それ故一般に連續的な運動の數であつて、或る特定の運動のそれでない。』(Phys. 223. a. 30) 然しながら、運動變化には、四種類即ち位置、實體、性質、量に關するものを區別し得るとすれば、種類を異にする運動の數従つて時間は異らざるを得ない。尙ほ運動は遅速の別を持つとすれば、その數たる時間も異るのであらう。然し我々は唯一の時間を持つ。運動の異種異質を認めつゝ、このことは如何にして可能であらうか。恰も同種類のもものは、その基準となるべきものによつて測られる如く、運動に於ても、すぐれたる意味の基準が考へられるのであらうか。これが立證されば、時間の唯一なることを確保し得るのであらう。アリストテレスに於ては、四種の運動變化中、位置運動特には圓環運動 (*kyklogonia*) が、就中天體の運動が優れた地位を占めてゐたのである。位置運動は、第一に、それがなければ他があり得ないが故に、即ち變質、成長、生滅はその基礎として位置運動を豫想するが故に、位

置運動に優越性が歸屬せしめられる。第二には位置運動は時間上他に先立つが故に、第三には位置運動は完成に於ては後なるが故に本性上先なるものである。(Phys. 260. a. 20—261. a. 26.) 更に又位置運動を除ける他の運動變化は、例へば生と死と、大と小との如き反對せるもの間に成立するものであるが故に、その始點に於て或ひは終點に於て靜止しなければならぬ、従つてそれらの運動は永久に「連續的」ではあり得ない。これに對し位置運動はこの資格を備へてゐる様であるが、今、位置運動を直線運動と圓環運動に分ち得るならば、直線運動は他の運動變化と等しく、對立者の間に成立つが故に「連續的」なる運動は、たゞ圓環運動のみである。(Phys. 261. a. 27—b. 26. Metaph. A. 6. 1071 b. 10.) 且つ圓環運動は永久的であり (Phys. 265. a. 25.) 運動中唯一の恒則なるものである。アリストテレスは圓環運動を天體運動に歸屬せしめてゐたこと(De caelo 287. a. 4.) 思ひ合はすならば、彼に於ては運動中、位置運動が、とりわけ圓環運動即ち天體運動が、すべての運動の基準であり、範型であつた。従つて明に他の運動はすべて天體運動を基準にして測られるのである。運動に諸種あり、遲速があるも、時間を語る時この天體運動が數へられるのである。従つて時間は唯一であり得る。アリストテレス自身『時間は或る連續的運動の數である、圓環運動の數で



ある』(De generatione et corruptione 337. a. 24.) といつてゐる。即ち時間の基體的存在の *potere d'u* (Phys. 219. a. 20.) たる運動が圓環運動が數へられるのである。(Brentano, Aristoteles und seine Weltanschauung. S. 116.) かくて時間は『地にも海にも天にも』遍在する。更に圓環運動天體運動は生せず滅せざるものなるが故に、時間は生じもしないし、滅しもしないと語られるのである。(Metaph. 1071. b. 6, Phys. 251. b. 10 ff.)

(1) 先に引用せるプラトンのティマイオスの箇所はこの點に就ても、アリストテレスの時間論に於てプラトンの、或ひは當時の天文學者エウドロクソス等の影響を思はしめる。

(2) *επιστήμη* に關しては後節に明にされるであらう。

(3) プロチノスは、(Enneades III. 7. 9.) 時間を運動の數と考へることを非難し、數とはすべての運動のそれか、又無秩序・不均齊な運動は如何にして數へられるか等を説いてゐるが、述叙が示す如く、これはアリストテレスに當らないことを知り得るであらう、——ここではプロチノスの擧げた他の論難は問題にしないで置く。

我々は時間が「運動の數」であるといはれる時、その運動は天體の運動であることを知つた。然し『數へるものが存在することが不可能ならば、數へられるものは存在し得ない、従つて數が存しないことは明である』(Phys. 223. a. 22.) とすれば、時間は數を意味する以上、數へるものがなければ、時間は存在しないであらう。我々は先づ數へるものは何かを考究しなければならぬ。ピロジカに於て『精神の就中ヌース

以外の如何なるものも數へる性質を持たない……』(223. a. 25.)と説かれてゐるが、數へることは何故にヌースの働きのなのであらうか。他の箇所ではヌースのみが過、現未に互る展望を持つことをいつてゐる。(De anima 433 b. 5.)我々は嘗て激しき論争を惹き起したヌースの本質の解明は、他日の機會に譲るとしても『ヌースとは、精神がそれにより思惟し、判斷するものである』(De anima. 429. a. 23.)と——少くともヌースの持つ一の働きとして——いふことは許されるであらう。數へることは順序數に於て見られる如く、單に無秩序に集積するのでなく、一定の秩序に従つて數へることとでなければならぬ。即ち思惟に従つてなされなければならぬ。數へる作用と思惟との間にアナロギーが存する。(Stenzel, Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles S. 96.)かく考へるならば、數へる作用はヌースに歸屬せしめられるであらう。<sup>(1)</sup>かくて、數へるもの、即ちヌースが存在する限りに於て、數へられたもの即ち時間が存在する。『精神就中、ヌース以外の如何なるものも數へる性質を持たないなら、精神がなければ、時間には存しない。』(223. a. 25.)所でこの言葉は時間の主觀的解釋を、アリストテレスが既に下してゐた様に思はしめるであらうが(Schilling-Wollny, Aristoteles' Gedanke der Phil. S. 126.)我々はかく解してはならない。感覺に於て、潜勢的なる能力が、顯勢になるの

は、感覺の對象が豫め存在し、その形相を受容することによつて、あつた。(De anima II, 12)。そしてこれは、感覺に於ける對象と能力の雙關を示して居る。假令へ感覺とヌースの作用との差別を認めなければならぬにしても (De anima, 429. a. 29 sqq.) アリストテレスに於て、感覺とヌースの類似が説かれ、兩者は構造を等しくするとせば、ヌースが時間を生み出すのであるとは考ふべきではない。共通感覺により認識された運動を、時間の基體的存在たる運動を、ヌースが數へるのである。そして數へることは基體的存在を、換言すれば未規定なるもの、潛勢的なるものを、顯勢化するものである。ヌースは、潛勢としての時間を數へることに於て顯勢化するのである。ヌースと時間の關係に於ても兩者の雙關を認めなければならぬ。<sup>(2)</sup>

- (1) アリストテレスはヌースにのみ時間を歸屬せしめたものではなかつた。(Zeller, Philosophie der Griechen II, 2, S. 401. Anm. 4.) De mem. et rem. 450. a. 9 では共通感覺もその能力として數へられてゐる。然し、この場合の時間は、その基體的存在たる運動の認識の能力として考へてゐたとも考へられるが、寧ろ人間のみが、過・現・未に互つて思慮し得、ヌースは人間のみに存することから、時間はヌースにのみ歸屬せしむべきであらう。(Tillich, Comment. to De anima p. 506—433. b. 7. の註に據る)

- (2) 尤もアリストテレスが純粹にレアリステイクであつたといひ得ないであらう。時間に於て *entité séparée* を認めなかつたといふ點に於て、寧ろイデアリズム的解釋に一步踏み出してゐたといふ方が適當であるかも知れないが、(Limelin, *Le Systeme d' Aristote*, p. 266.) 右の如く解すればやはりレアリズムと言はなければならぬ。

我々が、今までに明にし得たであらうことは時間の定義に表はされてゐる「運動」と「數」の意義であつた。殘された課題は「前後の順序に従つての」を説明することである。アリストテレスは時間と運動の隨伴 (*ακολουθία*) を考へてゐたことは、既述せる所からも知り得るが、我々は前後を先づ空間に於て、次には運動に於て知覺し、これが時間に於ける前後の問題に係つて來るのである。我々が時間が經過したと知り得るためには、運動の變化があるだけでは足りない、その運動の始點と終點とを知覺しなければならぬ。運動に於ける前と後とを知覺した時に、時間の經過を知る。即ち『我々は運動を前後により境界づけた時に、時間を知る。運動に於て前後を知覺した時に、時間が過ぎたといふ。』(Phys. 219. a. 22.) 時間とは、この二つの前後を兩端とする中間者に外ならない。『我々はこれらの前と後とを異れるものとして、更に中間者 (*μεταξύ*) はこれのもの、前後から異れるものとして、考へる時に、境界づける。』(219. a. 23.) 我々は運動せるものが、或る點を過ぎ行く毎に、今、今……と數へる、時間とはこの二つの異なる「今」に圍まれたものである。『兩端が中間者とは異つたものとして考へられ、精神が今今と二度——即ち前と後と——言ふ時、これが時間であるといふ。何となれば、時間とは今によつて境界づけられたもの (*τὸ ὁριζούμενον τῷ νῦν*) であるから。』(219. a.

22) 既に明にされた如く、數へられる運動は天體運動であつたからこれを例にとつて説明しやう。恒星が地球をめぐる運行せる時、我々はこれが一の度を過ぎれば「今」と言ひ、更に次の度に達すれば「今」と言ふ。これらの「今」が順次に數へられることによつて、時間の過ぎ去つたことを知るであらう。即ち天體運動が「今」によつて數へられ、同時に前後なる二つの「今」の中間者が數へられるのである。「今」を數へることは中間者を數へることであり、この數へられた中間者が、時間なのである。(Forstrik, 'Über die Abhandlung des Aristoteles von der Zeit', S. 448, Philologus, 1868.) 『二つの今の中間者はすべて時間である。』(Philoponus op. cit., S. 722.) 要言すれば、今今……と前後の順列に従つて天體運動を數へる時、その前と後とに限界づけられた中間者が數へられ、そしてこれが時間なのである。

我々はこれを以て、アリストテレスの時間の定義を、少くとも、その言葉を明にし得たと思ふ。然し、これと同時に時間に於て「今」が如何に重要な位置を擔はせられてゐるかを知り得るであらう。時間は數へられたものであり、そして數へられるのは「今」に於てゝあるとすれば、更に、——後に説かれるであらうが——「今」のみが存在するものであるとすれば、時間の本質は「今」にあるといはなければならぬ。(Heidegger, Sein und

Zeit. S. 432. Anm.) かくて我々は「今」の考察に移らなければならぬ。

(三)

我々は、時間の定義を追究したにも拘らず、未だ始めに擧げられたアポリアは一つも打ち破られてゐないこと見出さなければならぬ。時間の存在性そのものも何等明になつてゐない。時間の本質は「今」にあるとすれば「今」を究明することにより、時間の本性が明にされ、アポリアが解けるのではあるまいか。

さて、時間は絶えざる流轉をなしつゝ轉變するが、他方に於ては『同時の時間は同一である。』(Phys. 219. b. 10.)と語られる。時間とは、既に我々が知つた様に「今」と「今」とにより限界づけられたものであるとすれば、異なる時間を限る「今」は、異なるものであり、同じき時間を限る「今」は同じきものでなければならぬ。「今」は一方では同一でありつゝ、他方では異なるものとなるであらう。然し、このことは如何にして可能であるか。——これが解かるれば、先の第三のアポリアに通ずる道を見出し得る、——アリストテレスは「今」の基體的存在を *ἐπορεύου* と「今」の規定的存在を *ἐπιμαυαυτε* とを區別することにより、前者の同一を、後者の異變を説き「今」の同一か否かの問ひに答へんとした。然

し、基體的存在とは何か。フィロポノスはこれを *υποκειμενον* と解し、上り道と下り道は、規定的存在としては異なるが、その基體的存在として同一の梯子が考へられることを、その例として擧げて居る。(Philoponus, op. cit., S. 720.) 即ち基體的存在は全く無規定のものであるか、或ひは幾分規定を缺くものである。規定的存在に對して、その規定を缺いたいは、質料的なるものである。然し「今」の基體的存在とは何を意味するのであらうか。トールストウリクはこれに對して、多くの試論を擧げてゐる。

(Forstrik, op. cit., S. 450—453.) 第一に「今」の規定的存在は常に異なるものであるならば、規定的存在はあるもの、の規定なるが故に、基體的存在とはこのもの、に於て求められはしまいか。然しかゝる抽象的なる説明は事態を明にしない。第二には前後が「今」の基體的存在ではあるまいか。何となれば、「前後」が數へられた限りに於て今である』から。然し前後は如何にして「同一」であり得るであらうか。第三に各の「今」は前のもの、の後であり、後のもの、の前である「今」は同時に前と後との二つの側面を持つ。今の質料たる前後は數へられることにより「今」となるが、數へられるものは統一ユニタリティでなければならぬ故、前後は統一を持ち、従つてそれは基體的存在としての同一性を有し得るであらう。トールストウリクはかく解しつゝ、尙ほ確定的に答を與へてゐない。我

我はこれらの解釋の何れも不徹底であると言はなければならぬ。我々が今までに基體的存在について知り得たことを、翻つて考へて見るに、基體的存在は、規定を缺除せるものであり、且つ常に同一なるものであつた。更に『前後が數へられ得るものである限りに於て今が存する』(Phys. 219. b. 25.)といふ言葉を見出してゐた。「今」のこの「今」としての、規定を缺くものとして我々は「前後」を考へ得ないであらうか。前とも後とも、何れの「今」にもなり得るものとして無規定なる「前後」はプラトンの「不定の二」或ひは「大」小の如く、解し得られるまいか。この「前後」はいはゞ潜勢的なる「今」である。そしてこれを運動せるものを數へることを契機にして、この「前後」が數へられ、特定の「今、今……」として異別の規定を擔ふに至る。然し何れのこの「今」にもなるにしても「前後」なるものは常に同一であり得る。恰も廣場に居るソクラテスと、牢獄に在るソクラテスとは何處に居るかとの規定を持つ時は異なるものと言ひ得るが、基體的存在としては同じきソクラテスであるといひ得る様に、何等の規定を持たない「前後」は「今」の基體的存在として、同一であることを知り得るであらう。かく解すれば「今」の基體的存在を天體の運動とするのにあつて (W. Gent, Die Phil. d. Raumes u. d. Zeit. S. 7.) 運動體とするのにも (Schilling-Wollny, op. cit., S. 121.) 賛することは出來ないであらう。右の解



明は、同時に「今」の規定的存在の異なることを教へる。即ちヌースが「前後」を數へることにより、この「今」として顯勢化するが、この際「今」に一の規定が與へられる。即ちこの「今」かの「今」として「今」を限定するが故に、前の「今」と後の「今」とが異なるのである。こゝに「今」は同一であり得るや否やに關するかのアポリアを「今」の規定的存在と、基體的存在を辨別することによつて、打ち破られる。即ち「今」は同一であり、且つ異なるものでもある。しかし「今」が基體的存在に止る限り、時間ではなく、これをヌースが今、今……として數へ、異りたる規定を與へる、そしてこれを媒介にして異りたる「今」を限界とする中間者、即ち時間を數へるのである。『従つて時間は同一なる點としての數ではなく、何故なら、それは始めであり終りであるから、寧ろ同一なる線の兩端としての數である。』(Phys. 220. a. 14.) 二つの「今」が規定的存在としては異なるものとして考へ得ることによつて、かく言ひ得るのである。

時間は「今」により限界づけられたる中間者であるとするれば、このことは逆に「今」は時間の限界 *εἰμας, ὅμας* であると言ひ得る。従つて時間を境界づける「今」は、過去せる時間と未來せる時間とを境するものである。即ち「今」は過去の終りであり、未來の始めなのである。恰も一の點は左線の未端であると共に、右線の端初である如くに。――

アリストテレスは「今」を一種の點 *στυγή* として記してゐる。(Phys. 218. a. 19, etc.) 然し『過去せる時間の終りであること、未來の時間の始めであることは異なる』(Philoponus, op. cit., S. 763) とすれば「今」は二と考へなければならぬであらう。然し「一の「今」が過去と未來を結合しなければならぬ。然らざれば「今」が過去と未來との限界であると言ひ得なくなるであらう。而して「今」は不可分 *ἀδιαίρετος* なるものであり、そこには運動も靜止もあり得ない。(Phys. 233. b. 33—234. b. 24) 即ち「今」は一にして同時に二であると考へなければならぬ。(Brantano, Psychologie des Aristoteles, S. 91. f.) 一ものが觀點を異にすることにより、二つの側面を持つのである。かくて『今は時間を連續的ならしむるもの *συνεχέα* であり、——何となれば「今は過去せし時間と將來する時間を結合するから——時間の限界である。その理由は「今は」一の始めであり、一の終りだからである。……「今は時間を、潜勢的に分割する。今は分割するものである限りに於て常に異り、結合する限りに於て常に同じである』(Phys. 222. a. 10) と言はれる。

- (1) この箇所では『今は同じまゝである』と語られてゐるが、これは、『今の基體的存在が同じである』といはれる場合の「同じ」とは無關係である。時間を結合する時の「今」も分割する時の「今」も、共に顯勢的な「今」でなければならぬ。「潜勢的に分割」

すると説かれてゐるが、その『辯論的』は、「今」の分割が、點が線を分割する時の如く、明瞭ではないことを意味してゐるに過ぎない。故に我々は時間を結合する「今」として、具體的存在を、分割する「今」として規定的存在を考へることは許されないのであらう。

時間は「今」によつて分割結合され、而して「今」が異なるものとして、數へられた時に、成立つものであつた。運動に於て運動するものゝみが知られる如く、時間はいはゞ個物 *Tōseti* たる「今」によつて知られる。 *gnōnōnōn* (Phys. 219, b. 30) 然し「今」は、恰も點が線の部分でないのと等しく、時間の部分ではない。(Phys. VI. 1. De Ineīs insecūtibūs. 971. a 17) にも拘らず「今」は時間の中にある (Phys. 221. a. 15) のみならず、時間に於て重要な役割を演じてゐる。即ち「今」によつて時間に存在性が齎らざること見るであらう。過去未來は何れも非存在であり「今」のみが存在する。しかしその「今」は過去の終りであると同時に未來の始めであつた。「今」は自己の中に過去と未來を擔つてゐるのである。一つでありつゝ、二つの側面を有してゐるのである。「今」は過去と未來が存在する場面とでもいふべきであらう。「今」は止れる「今」ではなく流動する點として考へられてゐたとするならば (Philoponus, S. 737) 時の流れの何處をとるも、そこに現在する「今」及びそれに擔はれた過去と未來があるであらう。過去と未來は、かくて「今」の中に

あることによつて、そして「今」が存在することによつて、未來は未だ無きに拘らず、過去は嘗て在りしものにも拘らず、ある意味で存在すると言ひ得る。過去、未來の成立つ場面としての「今」を考へることによつて、過去、未來の存在性が獲得され、第一と第二のアポリアに通ずる道を開き得たと言ひ得るであらう。

## (四)

我々は「今」の本質を究明することによつて、時間の本性を明にし、その存在性を確保し得た。時間は天體の運動の數である、或ひは、スーアが「今」の基體的存在を顯勢化することによつて異なる「今」として數へる時、その異なる「今」の中間者が時間である。そして時間に於る「今」の地位からして、時間の存在が立證され、従つて時間の本質が「今」と考へられてゐたことを知り得た。(上述の如く「今」を解することはアウグスティヌスの時間論との連關を思はしめるであらう。)然し今、今……と數へることはベルグソンの指適せる如く空間化することでありとすれば、アリストテレスの説く時間は所謂「分量時間」でもあらう。又「今」を數へることにより成立する時間はハイデッガーの所謂「通俗的時間」でもあらう。しかしアリストテレスの時間論は最初の明瞭なる組織

を持つものであり、且つ、その後世に對する影響を思ふ時、我々は、これに新しき意義を興へるべきではなからうか。